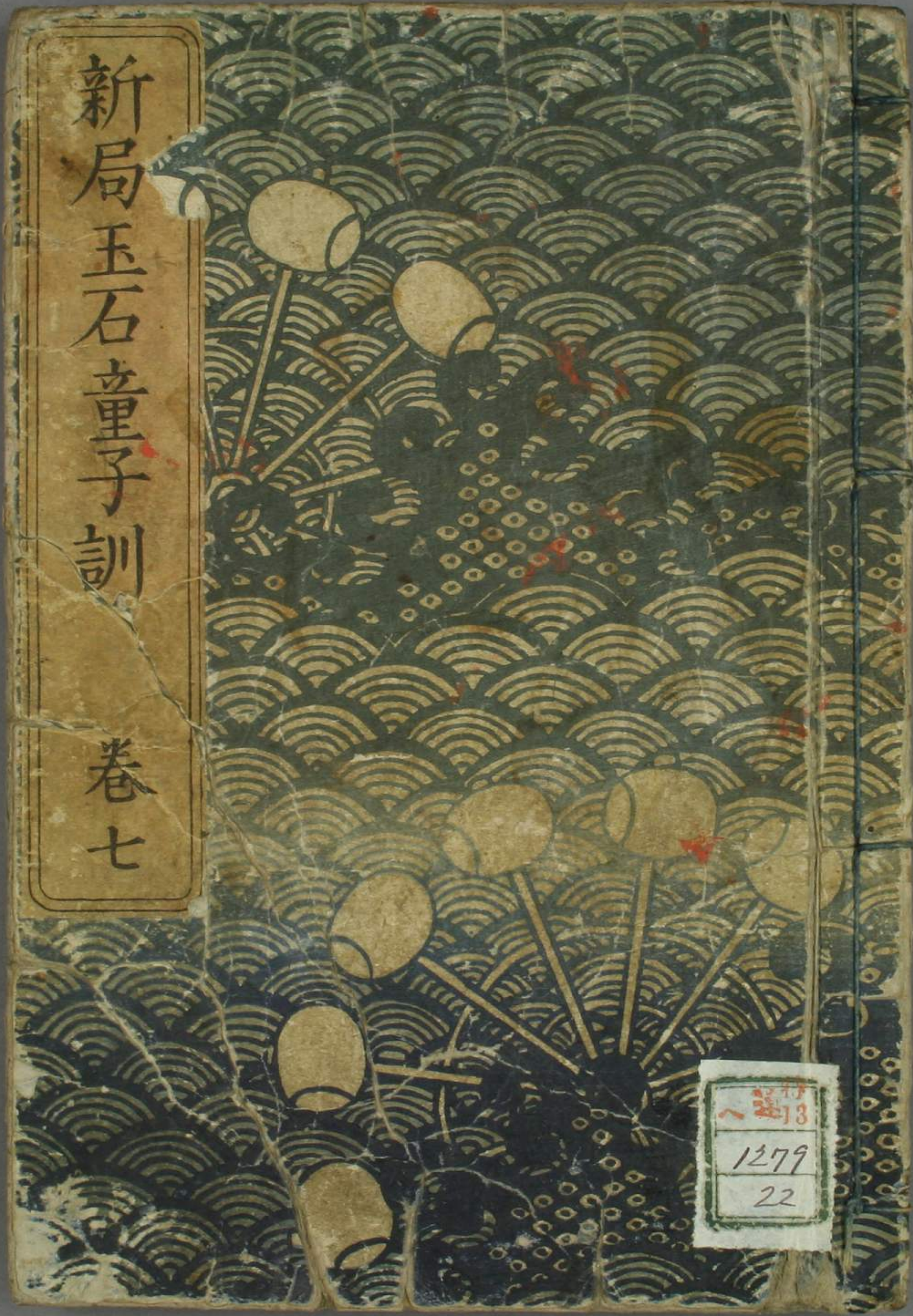




新局玉石童子訓

卷七



1279  
22



新編玉石童子訓卷之四上冊

東都 曲亭主人人口授編次

第三十七回

成勝通能遊歷して東路小赴く  
暗賢松下小睡てく 蜘蛛小吞る

登時九四郎ハ未六ガ陳ト爲。財囊のゆきうりて洗吟トて具々言ふ。如  
朱之奴ガ汝と挑争ふ折財囊の金と遞與さトて。後方遙小投遣け。照  
月猛可小雲隠れして四下暗くろりトて。その折朱之奴の支黨の鯨居ける者  
ありて金子ト小石ト入易さる。換是も亦知るく。必と思へども。備果して。其  
爲るく。徑小財囊と搔攫ひて逃も。鯨もまづ。小人ト欺く。便直りて。金  
石ト入易さる。何等の意を解かざら。と詞急迫多。論せれば。落葉も。其  
ゆ。九四郎刀袷開あ。開左ま。右もあれ。素より。那金三百兩ハ。朱之奴の爲に。之



へく遞與去一非如所要と果さざとも又他がふ入りて断縁金と思ふの邊  
 くもあらむが故何とるふ他が主君より與り來ぬ沙金二十一包残りて俺家  
 作佛の志願不因る。そも朱之奴の爲るれども其沙金と那圓金と交易の事  
 と思へば之後安らんと論せ九四郎うち笑ひて开は只是婦人の仁の佛意  
 然もあるべ。るれども朱六が愁ふ那金子をとり復えんとて反く金子と失ふ其  
 財盡とどのもてあふけれ。鄙語の壁と返して櫃を留む者不似す。倘他  
 人をのく是をいへ。朱六も疑ひるたふらむ然る件は百九十五金。咱も必贖  
 ふべ。とのと落葉のつあむと。その又要る理論之俺世帯とも譲らと思ふ御  
 身も那金子と贖はせて何かせ他人か。まののり。似けり。つあむ。か。論  
 せを九四郎推復して猶云云と論むを杜四郎諫めて争ふ。其義は今宵に限る

べく短夜をい酷く深き。明日又商量あふか。とふ乙其藝も共侶も良人を勸  
 る言果て。落葉と納戸へ案内とまれば朱六も兄の意見の理りる不感服を  
 重て復と詞も。咱もへ店へ夜宿んとて帚とて来と掃むと。乙其藝は  
 勤し臥躰儲も三所へ配る三張の帳垂て。各枕小就けり。然而其詰朝十二  
 屋の炊毒櫛工も乙其藝が赦あふ。一更九四郎も恙なく歸郷のうらむ。知りて早  
 早小の束あはれ。薪水の事。其人あり。早飯既果。か九四郎へ落葉乙其藝。杜  
 四郎朱六も皆納戸へ招取。へて又只昨日の金子の更を惜や。談をなす。上  
 市の奶々。ゆ。那。百九十五金。其盗見と知り。さ。復。ぬ。さ。あ。六。か  
 怒る。御身の慈善の心の。朱之奴。返。遣。ぬ。思。惜。と。宣。い。と。俺。牙  
 く。少。あ。ら。む。と。銭。財。の。あ。ら。む。も。親。し。中。の。も。言。品。出。來。て。使。疎。く。做。る。者。あ。ら。む。  
 任俠を磨く者。授受明白。なれば。乾見假子。も。従。何。を。と。く。人。を。制。せ。ん。

其の故に米六が失ふる。一百九十五金の内中、俺百金を贖ふて、目今脚身も  
 返さへ。と云ふと、落葉の推禁の如く、開へ又脚身の一徹するぞや。昨宵の如く  
 のぞか、杉木の家のと嗣せんと思ふ脚身の損被て、其百金を受えんや。況んや  
 亡るの米六刀袷の惣執、怒るる奴、俺も親俺渡さへ。財囊をるる孫、那子を  
 咎るる無理するべ。人の心はと失ふると比、是時運不由ると、杖の只ら拾ふ措  
 め、ねと言叮嚀論せとも、九四郎聞き頭と掉て、開へ辱に脚心を、人の養嗣  
 たる者、其家小益ありて、減さるる挿は、其の養嗣、方甲斐ある然るを  
 今俺們夫婦、小弟の所以と云ひ、いさゝか養家小贖らざらば、養母二百九  
 十五金の損とも被さるる、誰の益ある者と云ふ、然るを、別那金子の内中、脚  
 身百兩、他借して、朱之、小渡與、ぬい、るる、其金子、今返さるる。  
 守の御善政と空ふ、一、單脚身の、さるる、俺も亦百金の債ある者、似

たり、必る推辭、ぬい、と云ふと、見て勇む、俠氣、落葉、の意、争難て、又、さるるも  
 るる、りの、當下、九四郎、の懐、るる、長財、囊より、金二包、を、合出、して、四郎、米六、等、の  
 向いて、さるる。昨日、も、既、告、如く、這、金二百兩、治比、の、大人、と、父、の、賜、を、内、中  
 五千金、四郎、腕子、五千金、米六、ち、武者、修初、の、路費、おせ、と、取、せ、ぬ、所、に  
 又、五千金、子、益、林、寺、へ、布施、と、云、へ、五千金、俺、九四郎、へ、賜、ふ、物、即、是、之、是、を、の、て  
 俺、五千金、と、米六、の、五千金、と、合、して、百金、の、目、今、乙、其、藝、が、奶、々、小、返、して、那、債、を  
 贖、ふ、一、猶、九十五金、足、ら、ね、も、開、き、奶、々、の、慈、善、を、那、沙、金、と、交易、米六、之、奴、の  
 取、せ、ぬ、を、思、つ、れ、る、恨、の、あら、勿、論、米六、が、路費、の、俺、別、に、調、へ、起、初、折、小、渡、與  
 まで、四郎、腕子、の、五千金、目、今、渡、一、参、り、て、と、云、と、杜、四郎、推、禁、亦、め、不、其、金  
 子、を、い、ち、要、る、一、啓、初、の、日、也、も、好、勿、論、俺、們、又、が、修、初、の、路費、の、五千金、を、  
 足、り、ぬ、一、逆、旅、の、財、貨、を、是、福、を、招、く、小、度、幾、と、辨、へ、米六、も、俱、に、さ、る、る。

昨夜咱等ぐる復へる財囊の反て仇と做りて斯まで切勞と被まるといふ苦  
あは涯りるふ何で路費を欲まを術く計いぬねと勸解れ九四郎黙頭て  
然で商量整をりてくとも先一包の金子を會て故の如く長財囊の銀  
残る一包を傍小あけの團扇の載て卒とて落葉の遞與まゆを落葉の左右  
く受難て猶云と辭へも九四郎敢兼引き來六も亦杜四郎も俱は薦めく  
已さればし藝の孰を孰とも分るようく慰難て心苦く思ふの黙然とて  
在り程落葉のややく件の金子を受戴に涙暗て非如何といふとも  
今這金子の情由さへ少く受へる思ねとも受ね人の志の持るとある事何  
せん受ての後小左も右も又せんとのありぬへ好意と戴たゆり乙藝宜く憑  
をぞと謝して財囊へ件の金子を納めて項小掛る折ら炊婢が來て告を  
上市る村長の今朝風より落葉を酷く俵托て伴當一名を從て且兩個

轎夫の落葉が初轎子と吊せり索て十二屋へ來ければ落葉の九四郎乙  
藝と俱ふ遠く出迎へ奥るる坐席小請登あつ先茶と薦め果子と薦  
む主人夫婦が初對面の口誼も稍果一時落葉の村長小向ひてのやう奴  
家の今朝風より歇店へ還るべり小迎の便轎のいさ來む且奇事のあり  
お憶む時を程しぬ其故の箇様々々と乙藝の實の女兒をりて選り知ら  
む知らむをある環會けは崖畧を叫き告ぐ又かやう是等の内縁ある  
るれは這夫婦を上市へ喚とりて松木の家を嗣せま欲ある商量もあゆり  
ゆたの茂と飲びぬかとい説れて村長堂を拍鳴りて汗芽出さるる開料さ  
るは福之御身が老実慈善多も是まで善報のあらで朱刃祿の無頼のへり  
るり芥柄少女の夭折を最悼き思ひ小幼稚時小生別あ今愛友夫婦の環  
會ありは是則陰德陽報御身の慈善と薄命を神佛の憐れり

益小とそあらむらぬ。是の智をべしと祝して九四郎乙藝者其秋ひを舒小けり。  
 當下落葉又村長の談るや。御身も知各の如く。昨日陣館より返賜り  
 なる其金百九十五両と單奴家が腰に纏ひて大和還ら重荷せ不便あらそ  
 ありせらぬ。這春御身小借用ある百金と返しあるべし。御身も重擔多げとど  
 這裏受て受合ぬ小杯り。とのひ財囊と解開して金一包と合出とて開儘  
 村長小返して又ひき。利金の何なるも知らむはれぬ。本金の小作りとのひ小  
 村長合笑て件の金と受戴せら。懐も眼鏡と合出とて掛く圓金の包を  
 開けて而三番數へ見つ。眼鏡外して懐も財囊へ件の百金と替と納めて  
 初置帖より證書一通と合出とて甲乙と開見ら其一通と落葉小返  
 して残ると又懐へ夾めて落葉小向ひてひき。有斯るべし。知らぬも陣館  
 受て那金子の事と問甘めらん。飲と思ふもろ小證書と懐中して束小けられ受

都て事濟さ原那金子の山歳貢の積金とて用達。利銀を決て欲らむ。  
 風く銷印あゆ。とされて落葉の感謝の堪も受戴せら。開見とて開儘  
 九四郎小渡あか九四郎も亦是と讀見て隨即乙藝小吩咐。鏢硯と合出  
 甘筆と漆々印信と抹く落葉小返しけり。當下村長へ又落葉小向  
 ひて御身へ這回思ひけり。絶て久矣令愛小環會ぬ。久猶所要ヨラる  
 べし。復來はえん易からぬ。姑且止宿せぬ。咱も暇と稟せんとひき。軀く  
 身と起まると落葉の急小推禁め。奴家とも人さほ小留守と瀬て束小け  
 る小幾事と這留せし。柚の乙藝も九四郎も大和訪来る該れ。又逢かこ  
 別小わらぬ。奴家の御身と共侶小今日晝起ふも退るべし。とのひ小九四  
 郎へ乙藝者小吩咐。銚子盃酒菜又甲乙とて安排。村長と落葉小  
 薦け。送の口誼献酬も。分量るけれ。時と移さむ。更小準備の晝饌も。只

這席のさるるむ村長の伴當轎夫の中、款待届ぐる所る各飽て辭ふ時  
 住吉の神社で吹鳴るま午の貝の遠音遙くえけり當下落葉の九四郎と  
 乙藝と召て別を告れ九四郎乙藝の留めあき俱に異日と契りてのさう切々  
 猶兩三日も留めまらまと思へとも御一路人のある所人小任まる留守此宿の  
 心許ると宣はされ今ゆらふ力及び四郎来六が起れと目送果しゆて藝と  
 大和へ参らるる時宜より九四郎も共侶と思ふる。一霎時の御別ふいへ通  
 路酷暑と凌びて後の便を俟ひねと言語齊一慰めて九四郎が家裏る係  
 安藝半紙幾十帖とも製の木橋十枚有餘と土産小と轎夫小渡と轎  
 子小容措多又村長と土産料小一裏の人情ありの餘伴當轎夫電送  
 るる取まる裏錢仍届たる御食應ふ皆飲する者も告別と散動ゆれて  
 草鞋と更て立程小落葉の今ゆら思ふのいさくまれと嬉しゆ又悲しき胸

空りて詞寡く村長ゆら續けり立出れ杜四郎と来六と孟林寺へかへゆふ  
 途まを是を送らんと身装きて出て來る落葉村長小別を告る轎子の後  
 方小立程の九四郎乙藝と首老炊婢も橋工も皆店頭へ立出ると目送は  
 采の故郷へ飾るや秋の錦るる冬樹の黄楊の栴店舗の惜別の峯張の岐  
 岨小異なる大和路も同山路と想像る乙藝の小夏夏名日小か親の轎子の  
 見えざるまを暮れて立盡してを奥へ入りける。恁而是日九四郎六市四摠が来  
 るふ及びて昨宵よりあり奇事と送るる説示来六市四摠の駭嘆と朱之  
 众と憎むる日屬の倍て甚る更小落葉の誠心と感と慕と思ひける左  
 右の程小未過時候小做一か九四郎の孟林寺へ諸人とて。這回安藝のりりて  
 東の土産物一裏と伴當四摠の各るごとく俱々件の寺小赴けて任持  
 木女小見参ま杜四郎と来六も其席をたのむる當下九四郎の木女小拜面て



のけん

あひん

七



二賊一婦  
 人夢小正  
 覚と示む  
 あつ所の本文十  
 の左り見えり

いんや

だちん



治比中でありしと大江弘元の病臥の。且其口状と修達して寄進の金五十  
兩と合せて木金小渡與一け。是より先木金杜四郎朱六が。言詳  
告りける落葉乙其藝親子の再會當晩朱之が。落葉の金百九十  
五兩と竊合せて走り折朱六が。趕蒐て合復る小石也。財囊小金子  
るりか九四郎へ已と。朱六弘元の那身と朱六の賜りる金子二百兩を  
の。那失と贖ふて落葉朱六返る。既小石知りければ又其を以て  
意見と九四郎示す。弘元主の病臥胸安から思へども。老朽那  
身らぬ霜露の輕症る。久かきと瘡あり。就て那主の和殿  
と朱六の賜りる百金を。朱六の所以といひ。那贖小喪ひ。惜むる  
ら。朱六の不便の是の。朱六の武者修行中。和殿夫婦の大和。盤纏  
盤纏言う。朱六の故小庵。今這五十金と和殿弟兄の餞別。合せて

む。この金を九四郎の。赤くいへ。治比の大人の布施。小金子と賜り  
俗事小元なる佛の。伯を刺ま似。小可も然る。貯禄の。其美々許さぬ。ねと。朱六も。豫知せる。兄の。氣管。受な。も。ち。措せぬ。と。執合。本。頭。と。左右。ち。掉。然。あ。ち。這。金子。弘元主の。布施。と。面。少年。來。當。寺。同。宿。の。謝。物。小。と。あ。然。今。兩。少。年。の。住。方。定。ぬ。武。者。修。行。の。出。と。祝。と。徳。の。餞。別。と。せ。約。莫。出。家。人。者。の。錢。と。欲。佛。の。教。小。叛。て。塵。俗。も。劣。る。今。當。寺。破。損。修。復。の。費。用。徒。小。の。金。子。と。藏。め。賊。難。を。怕。ん。今。弟。兄。の。路。費。小。做。弘。元。素。意。も。稱。ふ。其。利。益。莫。大。然。も。徒。法。師。の。受。る。受。る。と。厭。思。發。跡。後。年。每。三。兩。五。兩。徐。小。返。世。貴。ふ。非。如。俺。る。

後入とも後住の為小反て益あり。枉く這意小任をてと論ある件の五十金と  
開が儘茶六の邊與より茶六を受戴て感謝不堪む。杜四郎と俱ふ其  
欽びと陳て九四郎を諫るを九四郎僅小頭と拾けり。師父の清談理に當  
然然で脱る路あらむ。權且借用仕らん茶六の實を寫志やと云ふも木玄推  
禁めり。いづでか小實小及人貸の俺心へ借る人の心へ幾數通の實ありとも  
借て返さざる争何のせん又一初のみ実あるとも返す人へ必返さん況法師の物と  
貸小其人と疑んや已終くとまど掉ば九四郎の之感服と。師父の大量今此  
世の公家人虫多くわが下。以取へ取れば廉と破る以取るをばへ。取れば  
慮と破ると孟子弟のと總角の時讀しと思ひ出るが。俺へ反り及ざりける。師  
父も亦義士ある哉脚意兼ていぬと稱て拜謝するける。姑且ま杜四郎へ  
九四郎談るや。咱も家尊の大人の病臥を傳す。其日より千里の路も一

時小走りゆき思へとも大人の消息ある在り。いま一功もある。治比へ入  
と許されむ然る今番の武者修の故郷へ還る首途一日も遅く起ま  
く欲む。這美を計ひぬねと家を九四郎うち捨て開る理りゆとも。一月半  
稔の通路をへ啓ゆるとそのも甘め幾を涯りと量知られぬ宿旅小去向とい  
そこの要る。三伏果て孟蘭盆まで俟ひ必酸熱醒る。朝夕涼からん  
其折まふ起の準備とこそ仕らぬ。と云ふ先懐より。圓金五十兩と金  
小と是と杜四郎の邊與より茶六の邊へ主僕の般纏と合とせむ。正  
正小是百兩あり。馬轎小乗む。粗飯と厭む。旅宿小儉約と旨とせむ。五  
六稔の柱へ。四郎腋子へ才子へ俺言と俟む。て萬事小なるるあはれも。  
茶六のいづく慎め孰の御小造るとも。比皆敵地の思ひと做て賊難と防ぐ。色  
色小惑む。欲小道すれむ才あるも。欺と思ふるも。侮らむ。主僕心と一猪小

世の英雄と交りて功多る還るるは其の美をあらわぬと諭せば四  
 郎も亦六も共侶の感佩して教訓道理至極せり胆銘とて忘るるを  
 遮莫百金の路費も半分の留めて大和へ赴く所用の御あり。とのり返  
 来六の五千金と九四郎のいふも觸を推戻して不其金子の治比の六人と當  
 寺の師父の和郎達へ餞別も御さる小庵私用ひんや益るれとと寄りて猶も  
 餘談不及ぶ程の木玄の其美と感とて急不堂うち鳴して木訥と召す茶を  
 看よ果子と薦ぐとて欺待を程不没日刺風も涼しく御一か九四郎の木玄の  
 歎びと舒別を告ぐ四摠とねく遠く家路と投ぐ退りけり然るに執云は是  
 等のよしと傳ゆしあの日より四郎亦六が起りて自親も大和へ赴く準備小衣の  
 解洗して襪袴刺せて不鳴虫の鳴ねも縫刺小暇のあつて夏過て七月中  
 旬の御し時候又少一の奇事ありけり其故と原々小皇裏小浮世代屋暖簾次へ

鍛冶郎と今様の悪事ゆゑ之罪と免むと久く獄舎の敷糸を引馳鳥太吹  
 五郎と共侶の拷問緊かりけれども馳鳥太吹五郎の死と究めて詭詐と  
 人と誣を暖簾次が為小直言して他の鍛冶郎が騙賊なりと知むと今様  
 が鍛冶郎の悪と幫助するを曉らしむ只目前の利の惑ふて今様と貸し所の  
 其悪意あつざるのみ俺們素より是と知りぬと陳とて数回の拷問小毫も言を  
 変ざりければ木玄頭職善の竟お其疑解く七月の初旬の暖簾次と獄舎より  
 饒り出して家小屏居在せけり左右も程小馳鳥太と吹五郎の那身小刀瘡  
 あり上小數日の呵責お其瘡破れて遂小破傷風小御しかち俱小獄舎小身致り  
 けりその故の鼻首せられ職善下知し七件の兩個の亡骸と俱小南小垂小存る  
 則暖簾次と乳守の里長も召きてみづる件の趣を云云と言示し且  
 公を暖簾次へ鍛冶郎の悪事と與せされも今様と貸し罪の遺故小

賄銀百貫文を献てて軍用充べし。又小槌の今様お使れる。兩個の小三板  
 打出の早歌丁兒の調子の始より支の仔細を辨知らせ且年三五未滿の儘女  
 られ俱小罪を饒ましと旋り賞罰是ゆ果けり。今程小十三屋九四郎の  
 人の噂小件の一をを知らず感づく已む情地小旃陀羅小相譚ふ。駝鳥太  
 吹五兩個の屍骸を柩お斂め是を昇せて當晩孟林寺へ送り來て住持木玄  
 と杜四郎宋六木訥もその美を告知らせ。又其時俺意小低抗駝鳥太  
 狸毛吹五郎の鐵屑鍛冶郎お等し。かゝる強人なれども俱小義侠の心ありけん。最  
 期の正念殊勝を其招ふ敢善人を誣む。あざりて。朱之成と首めて乙藝  
 六市四摠暖簾次お至るまで皆疑獄を免れり。我小功るとせむ。よの故小俺憐  
 思ひ。いづれ件の亡骸を當寺の境内小葬らむ。欲まの美を饒ませぬ。と憑ぬ  
 木玄點頭。俺も亦始より那二賊の誘らるるを粗知れ。悪縁なれども其亡骸と

葬る。又の厭から。但墓所を憚りあり。門外より藪蔭小埋むべしと饒  
 九四郎隨即旃陀羅小課せ。其地を深く穿せて。兩箇の柩を埋葬る。小  
 沙弥木訥も兼りて。安葬の讀經あり。木玄も立出。是を引導する。りけ。  
 其次の日。大江杜四郎。峯張宋六も。為小施主お做て。寺の門前より石工小課  
 無銘の五輪石塔波を造立。駝鳥太吹五郎の墓表おかけり。又住持木玄ハ  
 那時より藏置る。今様か頭髪の杪と他が生前の願ひの隨意高野山  
 骨堂お斂んと。柿小吩咐て。寄進の黄白小齋。紀伊國へ遣りける。左  
 右も程小孟蘭盆會あり。木玄ハ又近村の僧徒を多く招會せて。駝  
 鳥太吹五郎今様も。為小施餓饑の法會と修。是日杜四郎九四郎  
 宋六も。又施主お做りて。衆徒小齋を薦めるとも。結縁の為小參詣。老  
 弱男女極め。既小法會果ける。其夜分住持木玄の夢。今様駝

鳥太吹五郎が在り一世の姿を俱枕上ホ来て稟せり。俺們三人の前世  
 悪業ホよらて竟其死然を以て身と白双串を以て死して地獄ホ墮るる  
 夫禪師大慈悲の引接ホよらて。解脫清果の洪福あり極樂淨土ホ到るる  
 疑一ふ是見のふと又飲と思へ俱身と轉して忽地三莖の蓮花ホ  
 変る。西の麻羅に失ふけり。當下木玄敬驚覺く。單其言を思ふホ有るも似  
 たり無も似る。折ら轉る土まの音とゆ々徐ホ數と正ホ丑の時ホありける。  
 其詰朝木玄四郎染六木訥者ホ這奇夢を説示せ駭歎せらるる俱ホ  
 佛法不可思議の妙要と感得ける。此又住吉の里ホ今様とよく知りける者  
 中九四郎の語道那今様の容止美しく心操も風流て平生ホ歌を好ま  
 詠けり。何多折也。あはれ河竹の浮節敏ホ夜毎ホ替る枕の敷の定むる世  
 未敢るも。今宵誰が来てやゆら敷之の枕ホ知らぬ吾もさるホ有悠る風

流せられも其心の惑ひを際所宜から惜むべし。其生涯を誤りし彼  
 愚者也。此ホ賢人と名ひき。是ホ就て又一話あり。近曾東ホ隱沼と喚做して才  
 園する名妓の老て女僧ホ做らた。あはれり。書讀めと好み。あはれ人當春世ホ見れ  
 夫細人の瑣言を隨筆筆の刻本とて來て是見ぬとて貸るるれ。受て是と讀  
 見る程其入又訪來て那書の好まを問。あはれ沼の女僧答て。あはれ。已と知る曲  
 學者の忌憚所る。人を人とも思ひざら。孰は是冊子とて見。あはれ。一書一説と  
 信容れて古より人のあはれ。傳て。證文。ま。故事と誣るもあはれ。或は。方位と論  
 者。今。の。曆。日。中。載。る。者。の。金。神。八。將。神。と。と。取。る。ホ。足。り。と。と。一。過。當。の。限  
 言。入。抑。方。位。の。近。曾。唐。船。の。載。來。る。通。書。事。も。術。者。の。世。俗。と。恐。嚇。を。受  
 者。豈。只。金。神。の。と。る。と。備。方。位。の。用。捨。と。論。せ。ま。く。欲。さ。唐。山。の。通。書。と。送。る  
 く。看。破。り。て。後。ホ。下。一。意。ホ。這。編。者。ホ。唐。本。と。と。讀。う。べ。く。も。あ。ら。其。學。は。後

薄の聊る文と見ての知る況巻と成ると其考證ある條に竊人の説と取て  
己が説を倣せるるべし又近曾高名家の戲票亦粗地名の辨あると酷く謀りて道  
権の歌を證ふをこれと廻園雜記も證歌あると引き并べ引べ己が説の窮まる故又東  
鑑も證據あると知りてなうらるるなりとの罵る怨ある故於此言ハ陳壽の諸葛  
武侯亦舊怨ある故蜀志の列傳亦軍旅の怨拙とを識す心術の同とのいへ猶  
過ち或ハ孔子の言と引て論語と中庸とを何を疎忽する人の非とも欲先  
已と正しく詳ふまじ。這他珍説と思ひ以話も遼東の豚ハ似するのヨス其  
文の杜撰る假字づゝの孟浪るけりけるけれの天介遠彼も知らざる是れ  
かろえともうさうともいへれそ四巻ありのりも僅ハ二巻見て其似而非冊子返  
きて戲笑歌とみて遣ける其歌 假字つゝ天介遠彼も知らざるはのあつ  
と著述哉又淺つゝるるも知らざる人の非ともつたねぐ口の臭さよ。世あかの

如才女あれも其香臭の心つたる。只其形状の似るを見て甚思其劇も甚非も  
一草とと思ふも思ふべし。辨はさあさつとをのひける。是後の話説ハ介程ハ  
残る暑の消退して七月二十日あまのふれり。大江杜四郎成勝。張朱六郎通  
能ハ武者修仍の首途ハ心只管のそれて俱ハ吉日と擇む。住持木玄亦別と  
告て身の暇とこく木玄則其美と許し柿ハもて送らる柿ハハ高野山  
より既ハかへて寺ハ在り四郎朱六ハ為ハ所要の袂包と駝もも引提もも十三屋  
まで從ひももり然ハ木訥と首とて同宿の沙弥等別と惜みて出て是と目送のり是  
日亭午の比及ハ杜四郎朱六ハ俱ハ十三屋ハ来ハれ九四郎ハ藝ハ豫ハ準備ハ  
待て在り柿ハを旁とて晝飯と喫せると折乾ハ錢二番と取せて寺へ還遣  
四郎と朱六ハ奥坐席と酒飯の備ハ萬里の首途を歸りて去向ハ心と教説ハ  
且の秋ハ九四郎も乙藝と俱ハ大和ハと説示しるも只這席のるる日首

その言説を造り別と惜むのそ然とそと逆旅ならぬと杜四郎と米六其其曉の  
吸覚されて早飯果て俱の旅装を路費の金子に各勒肚小斂め或は肌衣の襟小  
縫入たるものあり杜四郎が両刀の那身小り一時父弘元の賜りたる大江家傳の名又  
又米六が兩刀の父通世を送刀を関の孫六をわけるの裏重か又路の煩ひるれど  
俱の身輕小打扮て油衣菅笠外小所要ある祇包と背小するもの佳而其詰朝杜  
四郎米六先京師まで造んとて乙藝年未愛顧淺くあり一欽びと舒且別と告  
草鞋穿締て立出れば九四郎の六市四摠と徒てみづら浪速を送りて竟小袂と分  
ちけり是日杜四郎米六路と走るの十二四里もまた又越く京都小来小ければ姑且這  
里の旅宿を日毎小出て洛内洛外の名所古跡を遊覽する憶を秋を送る程  
當時近江の觀音寺の城の佐々木近江判官高頼在任して六角殿と稱せし其  
家累世武功多し大諸侯を恐れ敏赤昌西の都る大内家の鶴峯小を及ぶ

威勢室町殿も憚らざる既小獨立の思ひあり一武藝小勝れ浮浪人那那城  
下小集合来て仕官と求る者少く況城内の諸臣の兵法陣列る馬駁  
劍槍棒白打小捷れ者若きりと噂えり杜四郎米六卒や是より先觀  
音寺の城下小赴け權且修仍做する世の英雄豪傑小值遇するもあ  
る一と遂小京師と立去て近江の町も思ひ多話分兩頭小程小未米六  
暗賢へ落葉が財囊の金と竊て走りける其夜分峯張米六追鬼られ件の  
財囊と金復されて僅小九四郎が取せぬ圓金五兩とだけければ只得是と盤纏小  
を投て住方小定むも亦京師小来れども洛内小憚りあれ東山の邊ゆく  
托る歇店小止宿多憶を之伏の夏の日と徒小送る程小單就思ひ惟る小大  
和る上市小空り然りとぞ這様ゆく今小故郷小ありと噂えり叔真房小便求め周  
防の山口へゆれがう只近江國坂田郡福富村の福富氏の舊塚中那家衰



文政堂刊 山崎屋

十五

文政堂刊

未

未



近江の山  
路朱之介  
蛇腹の葬  
らふ

朱之介

文政堂刊 山崎屋

文政堂刊



果これども黄金の母親阿健刀衾の賽武則で村盡処の小店と開いて存りて  
久の先や那里へ尋ねて身の隠れ処を倣ふやと尋ねるは是より折々市  
園まで解洗する夏秋の敗衣と一尺五寸をりる短中力を買合せて聊身皮を繕  
ひつ又阿健へ贈る此の土産物と準備をいかに數日の宿錢と共に盤纏小遣の  
圓金六錢で焼く倣りかど近江の隣國をりるをりて夏足下と思ひ其六月下旬  
東山なる歌店と立去りて單近江路を分る坂田郡の殊さらふ山又山を連りて去  
向嶮岨を渡れば朱之介の一日ふくいのを福富村の造りゆき次の日も残る暑小疲  
果て山蔭なる松の下小憩て憶を睡し程に忽地一箇の蜘蛛の太さ十圍の太さ  
づく長さのいさ量知られを近江沼より見れきて松を搦りて朱之介を只一口吞み  
けり畢竟這悪少年が大蛇の腹に葬りて後甚麼をぞ開く下回ふこと

新局玉石童子訓卷之四上冊終 村田

